

実践報告

「韓国の土となった日本人」浅川巧の生き方を韓国高麗大生と考える

三 橋 広 夫

元日本福祉大学 子ども発達学部教員

"The Japanese who became the soil of Korea"  
Asakawa Takumi's way of life is considered with Korean University Students

Hiroo MITSUHASHI

Formerly Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords : 浅川巧, 忘憂里共同墓地, 植民地主義, 柳宗悦, ナショナリズム

要旨

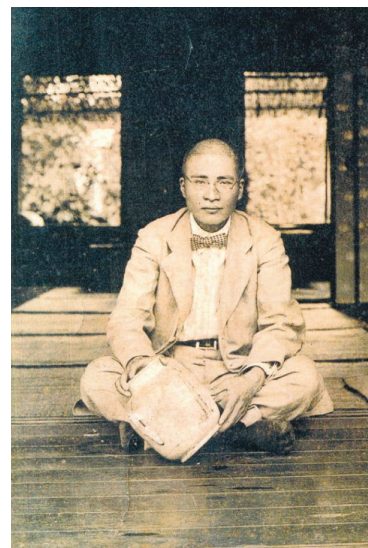
浅川巧は、朝鮮民芸・陶芸の研究家・評論家だった。朝鮮半島で植林事業を行う傍ら、朝鮮半島の陶磁器と木工を研究・紹介した。彼の墓はソウル郊外の忘憂里共同墓地にある。当時の多くの日本人とは違って朝鮮人と対等につきあった人物の一人として知られる。彼の生き方を学んで、韓国コリョ高麗大生は「日本の誤った政策に対しては警戒するものの、日本の人々まで嫌うのはやめなければならない」という認識を獲得した。

1. 浅川巧を取り上げる意味 授業のねらい

浅川巧 (1891～1931) は、朝鮮半島で総督府の職員として植林事業に従事する傍ら、朝鮮民芸・陶芸の研究家・評論家として朝鮮半島の陶磁器と木工を研究・紹介した。彼の墓はソウル郊外の忘憂里共同墓地にあり、当時の多くの日本人とは違って朝鮮人と対等につきあった人物の一人として知られる<sup>\*1</sup>。

したがって、日本の学生にとっては浅川巧という人物の生き方を学ぶことを通して当時の日本の政策や日本人の持っていた (合わせて自分の持っている) 植民地主義を相対化していくことが授業のねらいとなり<sup>\*2</sup>、授業が自身の中に内在する植民地主義を学生が自ら問う過程となることが求められるだろう<sup>\*3</sup>。

しかし、本実践は韓国高麗大生を相手にする授業であ



浅川巧 (写真提供 / 浅川伯教・巧兄弟資料館)



浅川巧の墓（ソウル市中浪区忘憂洞，浅川の墓番は「203363」番である）。木村誠氏撮影。

ることから、日本の学生への授業とねらいが異なるのは当然である。巧が当時の多くの日本人の行動とは大きく異なっており、朝鮮人庶民と親しく交わっていたことを学ぶだけでは足りないだろう。彼が亡くなったのち朝鮮に埋葬され、そして1966年に韓国林業試験場職員一同によって「浅川巧功德之碑」が建てられ、後に忘憂里共同墓地に移された。さらに、「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人、ここ韓国の土となる」<sup>\*4</sup>とハングルで刻まれるに至り（1984年）、毎年慰霊祭が実施されている。このことから、1931年に亡くなった巧のことを直接知らない人々がいったいなぜ彼を顕彰しようとするのだろうか。これが今回の授業のねらいとなる<sup>\*5</sup>。

## 2. 授業の実際と学生の意見

\* 授業は、浅川巧の生き方、当時の朝鮮人の巧観、今の韓国人の巧観の順に進んだ。

### (1) 忘憂里墓地に眠る浅川巧

授業ではまず、忘憂里墓地に埋葬されている人々の中で方定煥<sup>バンジョンファン</sup><sup>\*6</sup>、曹奉岩<sup>チョボンアム</sup><sup>\*7</sup>の二人を紹介した。方定煥は知っていたが、曹奉岩についてはあまり知らなかった。

この墓地にたった一人、日本人が埋葬されている。それが浅川巧だ。彼はどういう人物だろうか。そして、なぜここに埋葬されているのかを探っていこうと韓国の学生に提起した<sup>\*8</sup>。

「朝鮮の山といふ山は殆ど禿山である」、それは「植林など更に考るところか我一がちに互に競ふて伐り取りて顧みなかつた」<sup>\*9</sup>ことに原因があるというのが、当時の日本人の認識であった。朝鮮総督府も朝鮮半島全域にわたって森林調査を実施し、「荒廃」した山林を強調する。

その背後には善良広大な森林確保という意図があった。そして、その「荒廃」の原因として力説されたのが火田（焼畑）であった。本多静六（東京帝国大学林学教室教授）は、「朝鮮に於ける火田の性質及び改良策」<sup>\*10</sup>という論文で「野蛮の遺業」である火田によって山林荒廃をもたらされたとし、総督府の火田整理に大きな影響を及ぼした<sup>\*11</sup>。

1914年5月に巧は朝鮮に渡り、朝鮮総督府農商工部山林課試験所の雇員となった。1917年に「テウセンカラマツの養苗成功を報ず」を石戸谷勉との連名で『大日本山林会報』に発表し<sup>\*12</sup>、1922年に判任官の技手となり、養苗の仕事に励んだ。1924年には「苗圃担当の友に贈る」<sup>ひょうほ</sup><sup>\*13</sup>という文章を書き、仮播・代播という新しい養苗法を紹介している。この方法は「露天埋蔵法」と呼ばれ、巧の業績としてよく知られている。巧がこの方法を発見したのは、日頃から朝鮮人と接し、彼らの生き方に学んでいたからだったという。

さらに、1929年には「禿山の利用問題に就いて」を発表し、「利用すべき対象物の性質を研究しその性質に従って利用上のことを考察する」<sup>\*14</sup>べきだと主張した。「結局山林を自然法に帰せ、それより道はないのだ」<sup>\*15</sup>というのである。

巧はまた兄伯教<sup>\*16</sup>の影響を受けていたこともあって朝鮮の陶磁器に大いなる関心を傾けていた。そのことが柳宗悦との交流を惹起する。柳が巧の家で「一つの大壺」を見たとき、今までに経験したことのない感情に打たれたという<sup>\*17</sup>。そして、巧に影響を受けた柳は、何度も朝鮮と日本を往復しつつ朝鮮民族美術館<sup>キョンボクン</sup><sup>\*18</sup>設立に邁進していくのである。寄付金は集まったものの適当な場所がなかなか決まらず、結局景福宮内の緝敬堂<sup>チブキョングン</sup>を借りて開館した。1924年の開館後、春秋の二回、展覧会を開催した。

その後、1929年に巧は『朝鮮の膳』を出版したが、「跋」を柳が書いている<sup>\*19</sup>。この中で「資本の向ふを張る労働ではなくて資本があつてもそれに自由にされない仕事、又なくても勝手に仕遂げられる仕事でなくては人間に平安を来たらさないであらう」<sup>\*20</sup>と労働観を表している。こうした労働観も「朝鮮の人達との長い間の交際が生んだ極めて通俗的の叙述」<sup>\*21</sup>の根本をなすのである。

巧の死後、1931年9月に『朝鮮陶磁名考』が出版された。その目的を「先づ第一に器物本来の正しき名称と用途を知つて置く必要がある」と謳い、外国人が朝鮮の



朝鮮忠清南道鷄龜山窯跡の浅川兄弟（1928年8月4日）。  
右から伯教，柳宗悦，巧

陶磁器を扱う場合その用途を誤り，勝手な名称を付けることに警鐘を鳴らしている。そして，「朝鮮民族の生活や気分にも自ら親しみある理解」を持つことを読者に期待した<sup>\*22</sup>。

さて，1923年9月1日に関東大震災が起き，それをきっかけに日本軍・警察，そして自警団などによる朝鮮人などに対する虐殺が恣行された<sup>\*23</sup>。巧は，故郷の山梨県に住む義弟浅川政蔵から「東京の大震災の災害は実際の災害の十分の一に過ぎない。他は地震のためでなくて不逞朝鮮人の放火による火災のためであると伝えられ，東京及其近郊の日本人が激昂して朝鮮人を見たらみなごろしにすると云ふ勢ひで善良な朝鮮人までが大分殺され」という手紙を受け取った<sup>\*24</sup>。そのこともあり，日頃から朝鮮人と交わっていた浅川にはどうしても放火などを朝鮮人の仕業とは思えなかったのである。

かように巧の朝鮮人に対するまなざしは温かい。1922年の旧正月の日記には「道へ出ると美しく着飾った子供達が喜々として往来してゐる。朝鮮人の子供の美しさは又格別だ<sup>\*25</sup>」と記されている。

1923年9月23日に巧は，金万洙を連れて北漢山一周に出かけ，文学についても語り合ったという。汽車が思ったより混んでいて，清涼里まで立ち通しだった。酒幕で偶然，吳相淳，廉尚燮，卞栄魯らと出会って日本人と朝鮮人の問題や東京の震災に関して気持を上げた<sup>\*26</sup>。

さらに，巧は柳とは違って朝鮮の美を「悲哀の美」ではなく，未来に発展する美と見ていることにも留意すべき

である。

授業では，方定煥・曹奉岩についての質問に次いで，農業試験場職員としての浅川巧（資料<sup>27</sup>），民芸家としての浅川巧（資料<sup>28</sup>），関東大震災と浅川巧（資料<sup>29</sup>），朝鮮人へのまなざし（資料<sup>30</sup>）——ここから，浅川巧という人物についてどう思うか聞いてみた。なお，別に「浅川巧略年譜」を配布した。

資料 「こんな山間に棲んで居て僅かの林も持たず，祖先伝来の入会地の何千町歩が一手に個人の有になつたのだから盗むのも無理もない気がする。山番の監視がいかに厳重で盗採者に対する刑がいかに峻酷であつても，山は青くなるまい。山が青くなるためには，地元に住む人達の理解ある同



浅川巧（高崎宗司編『朝鮮民芸情を必要とする。』<sup>\*27</sup> 岩波文庫，2000）より

資料 「正しき工芸品は親切な使用者の手によつて次第にその特質の美を発揮するもので，使用者は或意味での仕上工とも言ひ得る。……朝鮮の膳は淳美端正の姿を有ちながらよく吾人の日常生活に親しく仕へ，年と共に雅味を増すのだから正しき工芸の代表とも称すべきものである。」<sup>\*28</sup>

資料 洪淳赫は『東亜日報』1931年10月19日付に「浅川巧著『朝鮮の膳』を読んで」を書いた。彼は，1927年に早稲田大学を出た，徹新高等普通学校の教師で，かつて柳（宗悦 訳者）の「朝鮮の美術」と題する論文を「もっとも理解ある鑑賞家の論述」と評価した（1928年）人物である。

「われわれが持つ美術・工芸に対する研究が私たち自身より外国人の中で旺盛であることを認めざるを得ない。その中には私たちの美術・工芸を中国と日本の間をつなぐ一つの媒体としてみる皮相な観察もあるが，一歩進んで理解と憧憬を内包した研究と鑑賞もまた，少なくない。その独特な価値を求めている人も多い。

われわれの美術・工芸の中で，もっとも世人の人氣を引いたものは，陶磁器である。したがって，これに対する資料蒐集と研究発表は少なくない。これらのも



のによって、私たちはわれわれのものを、より理解するようになった。」<sup>\*29</sup>

資料 9月11日、巧は場長室に呼ばれて、場長から次のように命令された。「今回の東京での災害について朝鮮人の或者のつた態度は同情の余地絶対に無い。かりそめにも同情するが如き様子があつてはならん。彼等朝鮮人の反省を促すためにきびしく責めなくてはならん」。

しかし、「自分は信ずる。朝鮮人だけで今回の不時の天変につけこんで放火しようなんといふ計画をしたものでないと。寧ろ日本人の社会主義者輩が首謀で何も知らない朝鮮人の土方位を手先に使つてしたこと」と思ふ。一体日本人は朝鮮人を人間扱ひしない悪い癖がある。朝鮮人に対する理解が乏しすぎる。……自分はどうしても信ずることが出来ない。東京に居る朝鮮人が窮してゐる日本人とその家とが焼けることを望んだとは。……自分は彼等の前に朝鮮人の弁護をするために行き度い気が切にする。」<sup>\*30</sup>

資料 「田添氏と京城に出て公会堂の雅楽の会へ行つた。……民族の歌よ、盛になれ。民族よ、これ等[の]音楽を復興せよ。王を護つた調べは民族を励ますであらう。王の動駕の曲はそのまゝ民族の進展の曲になれ。高麗の軍中楽は民族奮起の楽になれ。賀宴舞踏の曲を民族打揃つて奏する平和の日よ来れ。」<sup>\*31</sup>

高麗大生の意見を見てみよう。学生の名前はすべて仮名である。

資料から見て、浅川巧は当時の他の日本人と違って人権と平等意識を自然に身につけ、感受性が豊かで自分だけの美を追求する独立的な人だったと思われる。彼は植民地統治の支配層である周辺の多くの日本人が朝鮮人を蔑むのを見ながらもまったく同調せず、朝鮮人に対する抑圧的な植民地統治が誤っていたことを認めていた。また、自身が発見した韓国の美を自身の主観によって揺れることなく愛し、愛情を表わすことを厭わなかった。朝鮮人もまた彼を敵対感なしに受け入れ愛情を持つようになる結果をもたらし、正しい意識を持った数少ない日本人にも彼は尊敬の対象となつただろうことに疑いの余地はない。(カン・ジソン、1年)

浅川は日帝強占期に苦痛を受け抑圧されるわが国の

人々の姿を見て、これを「日本人」の観点から見よりも一人の「人間」として見つめた。当時わが国の人々が迫害される中で日本人に利用され無視された韓国の人々を気の毒に思った。また、韓国の人々や文化に対しても大いなる関心を持っていた。だが、そのような心がけに比べて何か積極的に韓国の人々の状況を改善するために努力したわけではなかったと思われる。(イ・ヨンジョン、1年)

初めは朝鮮総督府の農商工部山林課農業試験場、林業試験場で働き、淳美端正な工芸品、雅楽などに関心を持った好奇心が旺盛な人物だと思った。そして、朝鮮の膳について「淳美端正な代表」という表現をしたこと、「自分は彼等の前に朝鮮人の弁護をするために行き度い気が切にする」と表現したことなどを見て浅川が朝鮮人に肯定的な影響を及ぼす人物だと考えた。しかし、「山が青くなるためには、地元に住む人たちの理解ある同情を必要とする」、「朝鮮人に対する理解がなくてはならない」という言をもとに読み直してみると、朝鮮の山林、林業、農業などによる「青さ」のために朝鮮人を理解しようと努力し、植民地の人々に同情と憐憫によって接した人物だといえる。(イ・インソン、1年)

浅川巧は韓国を愛した人だ。重要なのは、浅川巧が韓国を愛するという行動が優れた存在が施す積善のような理由からかどうかだ。彼は、朝鮮の文化それ自体が好きだということからもう一步踏み出して、これを日常生活の中で実践した。周辺の朝鮮人を助け、朝鮮の服を着用することさえしたのだ。当時の社会的雰囲気には照らしたとき、これはとても勇気あることだと見るほかない。最後に彼は平和主義者だった。資料を見れば、彼が朝鮮の音楽を賛美しながらいつかみながその歌を演奏できる平和の日が来ることを望んでいたことがわかる。彼は朝鮮人を自身と同等な人間と考え、彼らの文化もまた心より接していた、一人の良き日本人だった。(キム・スハン、4年)

彼らは、浅川の行動について概ね肯定的に評価している。カン・ジソンは「正しい意識を持った数少ない日本人にも彼は尊敬の対象となつただろうことに疑いの余地はない」と、朝鮮人にとってだけでなく、心ある日本人にとっても尊敬されたと考えている。「植民地の人々に同情と憐憫によって接した」(イ・インソン)、「朝鮮人

を自身と同等な人間と考え、彼らの文化もまた心より接していた、一人の良き日本人だった」(キム・スハン)という意見がそれを物語る。ただ、イ・ヨンジョンは「(浅川が)何か積極的に韓国の人々の状況を改善するために努力したわけではなかった」と感じていた。

## (2) 当時の朝鮮人は浅川巧をどう思っていたか

1931年4月2日、巧が急逝し、4月4日に葬式が行われた。そのときの様子を柳は次のように記した。

「彼の死が近くの村々に知らされた時、人々は、群をなして別れを告げに集った。横たはる彼の亡軀を見て、慟哭した鮮人がどんなに多かつた事か。日鮮の反目が暗く流れてゐる朝鮮の現状では見られない場面であった。棺は申し出によつて悉く鮮人に担がれて、清涼里から里門里の丘へと運ばれた。余り申し出の人が多く応じきれない程であつた。その日は激しい雨であつた。途中の村人から棺を止めて祭をしたいとせがまれたのもその時である。彼は彼の愛した朝鮮服を着たまゝ、鮮人の共同墓地に葬られた。」<sup>\*32</sup>

以下の資料<sup>チェボッキョン</sup>は、巧と同時代に生きた崔福鉉<sup>キム・イ・マン</sup>と金二万が当時の巧の行動について語った文章である。特に、金二万は、巧が独立運動に関心がなかったと語っている。

資料<sup>チュンアン</sup> 中央学校の生徒であった崔福鉉は、同校の教師であった赤羽王郎<sup>\*33</sup>に連れられて、日曜日には郊外スケッチに出かけた。そして、「心も軽く、身も軽くだどりつく処は、浅川先生のお宅であつた。先生は真に喜びを知るものゝ如く喜んでくれた」<sup>\*34</sup>と書いている。崔らとの交友は、赤羽が1923年1月に朝鮮を去った後も続いた。

なお、崔福鉉は、解放後教育家として一家をなし、母校の後身・中央高等学校の校長、ソウル特別市教育委員会教育監(教育長)などを歴任して、1979年に亡くなった。なお、その息子<sup>チャンハン</sup>創漢は若くして亡くなったという<sup>\*35</sup>。

資料 1919年から1963年まで林業試験場で働き、「木のおじいさん」と呼ばれた金二万は、定年退職後も嘱託・顧問として働き続け、1985年11月7日、85歳で亡くなった。その間、樹木品種保存と薬草園造成の功績により大統領表彰をされたこともある(『ソウル新聞』1985年11月8日)。その金二万が1979年4

月12日に、次のように語っている。

「浅川氏は、韓国語を非常にじょうずに話し、常に韓国語で話した。三寸[三親等]、四寸という韓国の親戚関係の寸数などもたいへんよく知っていた。韓国人同僚に対する態度に差別はなく、日本人同僚から『あなたは韓国人か』と悪口をいわれ、迫害されたほど、韓国人を愛した。それだけでなく、彼は朝鮮服を好んで着て、夕方にはパジ・チョゴリに木履をはいて帰った。長いキセルを好み、中国の帽子をかぶり、縄で編んだ袋を背負い、市場にいった、韓国の骨董品・陶磁器などを日常的に買い集めた。そのおかしな様子のために、倭奴(日本人の蔑称)警官から取り調べられたこともよくあったという。

浅川氏は、林業試験場内の官舎に住み、平素、韓国人に親切で、韓国人を愛したために、正月や節季のときは、たくさんの韓国人同僚が遊びにいった。自分は飢えても、困っている人を助け、何人かの韓国人の学生には奨学金を与えていた。対象は主に国民学校の生徒であり、中学生も二、三人いたと思うが、たいていは林業試験場の職員の子女であった。」<sup>\*36</sup>

「独立運動に対する関心は、なかったと思う。浅川氏自身が中学程度の学校しか出られず、非常に貧しく生きてきたので、韓国人労働者や同僚たちを暖かく世話をしたのではないかと思うが、独立運動に対して、深い理解があったとは思われない。」<sup>\*37</sup>

資料<sup>キム・イ・マン</sup>から感じることを書かせた。特に巧と交際のあった二人の韓国人(崔福鉉・金二万)の巧観について意見を考えさせた。

当時の朝鮮人の浅川巧に対する肯定的な態度と評価を見て、彼は朝鮮人と皮相的な関係を維持したのではなく、心の中で深く朝鮮人を愛情と真心を尽くしていたと思われる。資料の最後の段落に現れた「独立運動に対する関心は、なかったと思う」という意見を見たとき、彼の朝鮮に対する関心と愛情は決して日本の植民地支配という不正に対する怒りと朝鮮人に対する憐憫から始まったのではなく、極めて純粋な朝鮮の文化、生き方、自然に対する愛から出たものだということがわかった。(カン・ジソン)

朝鮮の独立に介入した人物ではないが、それにもかかわらず朝鮮の文化や人々に多くの関心を寄せた人物

だったため、おそらく私がその当時の朝鮮の人だったとしても肯定的態度を取ったと思う。朝鮮の親日派で悪名高い人々が多かった中でむしろ朝鮮人の側に立って助けてくれる日本人は特異ながらもありがたく感じられただろう。また、韓国語まで自由自在に駆使していたというから、互いの意思疎通も可能だったためにいっそう身近に感じていたと思う。(イ・ヨンジョン)

浅川は朝鮮人を理解しようと彼らの生活の中に入って彼らのように生活した。このような行動が朝鮮人にとっては日本人が自分たちのために自分たちを愛すると感じたと考えられる。しかし、それが真に朝鮮人を大切にしたことなのか疑問を感じる。私たちが海外奉仕に行くときそこに住む人々に対して憐憫と同情を感じるように、山林、農業、林業試験場で働きながら自身の国が支配している朝鮮の地の山林、農業、林業などを通して「青さ」の富強のために、他の日本人と違って朝鮮人の文化や生活などを理解することによってそれを達成しようとしたのではないだろうか。独立運動に関心がなかったということ、朝鮮人の弁護のために走っていきたい心などを見ると、植民地と関係なく朝鮮の「青さ」のために朝鮮人の研究をしたのではないか。(イ・インソン)

浅川巧は自身の韓国に対する愛を言葉だけでなく日常の中でも積極的に実践した人だ。支配層に属する日本人として被支配層に属する朝鮮人に偏見なしに接するのはとても難しかっただろう。それにもかかわらず、彼は積極的に自身の周辺の朝鮮人を助け、彼らに助けられた人々はいまだに生き残って彼に謝意を表している。アフリカの諺によれば、人が本当に死ぬのは肉体が死ぬ瞬間ではなく、人々に忘れられた瞬間だという。そのような観点に照らすと、浅川巧は彼が助けた人々が世の中に存在し、彼らから浅川巧の話を聞いた私たちのような人間が存在する限り永遠に生きているだろう。(キム・スハン)

当時の朝鮮人が巧をどう見ていたかを考えることを通して、巧の行動を絶対的なものとしてとらえるのではなく、朝鮮人との関係の中で彼の生き方を考えることになる。「彼の朝鮮に対する関心と愛情は決して日本の植民地支配という不正に対する怒りと朝鮮人に対する憐憫から始まったのではなく、極めて純粋な朝鮮の文化、生き方、自然に対する愛から出たものだ」(カン・ジソン)、

「朝鮮の親日派で悪名高い人々が多かった中でむしろ朝鮮人の側に立って助けてくれる日本人は特異ながらもありがたく感じられた」(イ・ヨンジョン)、「浅川巧は彼が助けた人々が世の中に存在し、彼らから浅川巧の話を聞いた私たちのような人間が存在する限り永遠に生きている」(キム・スハン)と分析している。一方、イ・インソンは「植民地と関係なく朝鮮の『青さ』のために(浅川は引用者)朝鮮人の研究をしたのではないか」と疑念を呈している。彼は資料 に出てくる林業試験場職員としての巧に最後までこだわっていくことになる。

### (3) 現在の韓国人は浅川巧をどう思っているか

ここでは巧の評価を通して自らの認識を語らせるねらいがある<sup>\*38</sup>。つまり、高校生の意見(資料 )に見られる、ナショナリズム(国家の論理)によって植民地支配を批判することでは、(自らの)植民地主義は清算できないことに気づくか、である<sup>\*39</sup>。

キム・ヨンボク(民学会理事)は、韓国語を駆使し、韓国民衆とともに生きた巧を慕う韓国人は墓をよく訪れると発言する(資料 )。一方で、韓国的高校生は巧だけをとりたてて論ずるのは誤りだ、日本人は植民地支配の責任を取っていないので友好関係を築くのは難しいとする(資料 )。学生には、この二つの意見のうちどちらを支持するか書かせた。

資料 なお、巧の墓は忘憂里にある3万余の墓のうち、ただ一つの日本人の墓である。最近では、韓国でもよく知られている、民学会踏査担当理事(1996年当時)のキム・ヨンボクが書いた「忘憂里墓地を訪れて」でも、ほかの歴史的人物の墓11基とともに巧の墓が紹介されている。そして、彼は、韓国の芸術を愛した三人の日本人として柳宗悦と浅川兄弟をあげたあと、次のように巧を評価している。

「日帝下の韓国を、特に韓国の芸術を愛した三人の日本人がいたが、浅川巧、巧の兄伯教、柳宗悦がその人である。……中でもただひたすら誠実に韓国をあるがままに感じ、韓国人と交わって生きた人は浅川巧である。残りの二人は韓国語ができなかったが、巧は韓国人と同じように韓国語を駆使し、韓国人の村で韓国人のように生きた人であった。こうした意味でほんとうに韓国を愛した人と言うのである。浅川巧とともに働いたことのある韓国人はよくここを訪れる……。」<sup>\*40</sup>



資料 「浅川巧が韓国人を受け入れたことは確かにすごいが、浅川は何十万人のうちの一人である。その事例をもって手がかりとするのは無理ではないか。また現在の日本人の姿勢をそのままを受け入れると友好関係が築けるかは疑問である。」<sup>\*41</sup>

数量的には、資料 の意見に賛成 (38 人)、 の意見に賛成 (27 人)、どちらとも言えない (14 人)、不明 (1 人)、計 80 人である。

資料 の意見に賛成する。日本と韓国が過去に植民地支配の関係にあったことを離れても他の国籍を持つ人がわが韓国の文化を心深く愛し、それに尽くしたという事実は十分に意味あることであり、韓日関係の葛藤緩和にも肯定的な影響を与えたことは否定できない。資料 の意見はあたかも韓日の友好関係構築に反対して葛藤を発生させようとするものだ。数十万人の中の一人によっても私たち韓国人の心にある日本人を憎む感情を少しでもうち消し、和解の方向に進むことが現在の私たちが選択すべき正しい道ではないのか。(カン・ジソン)

私は資料 の意見に賛成する。浅川がたとえわが国の人々や文化が好きで多くの助けになったとしても、こういう事例のいくつかによって当時独立運動をくり広げ苦痛を受けた数多くの独立活動家や罪もなく苦痛を受け利用されて死んでいった人々の怨恨を解くことはできない。一人の日本人が朝鮮人によく接したことで日本が当時犯した誤りは別個の問題だ。日本が正式にわが国に謝り、当時の誤りに対する適切な待遇と補償をしないならば、わが国と日本の葛藤は決して解決されることはないだろう。(イ・ヨンジョン)

資料 に賛成すると同時に にも賛成する。 とがそれぞれ人間としての浅川、民族としての浅川であるため賛否を考えることはできない。二つともに賛成をしたのは、浅川巧が日本人だが韓国を愛し韓国人のように生きた人というのは正しいが、彼の目的が韓国人のためのものではなく、すなわち植民地朝鮮を独立させようとするのではなく、朝鮮の「青さ」を豊かにするためだったため、簡単に良い人だったとは言えない。(イ・インソン)に関心がなかったということ、朝鮮人の弁護のために走っていきいたい心などを見ると、植民地と関係なく朝鮮の「青さ」のために朝鮮人の研

究をしたのではないか。(イ・インソン)

私は資料 と の主張が相反するとは思わない。

と はともに浅川巧が明らかに朝鮮を愛する人物であり、韓国に対する高い理解を通して真の愛に到達した人物であったことを認めている。 はそれに付け加えて、浅川巧がすべての日本人の典型とはなることはない指摘しているにすぎない。浅川巧がたとえ韓国に対して偏見のない愛を見せたとしても、彼の行動はほとんど個人的善行に限定され、朝鮮人に対して厳酷だった日帝強占期の社会の中で意味ある変化の流れを引き出せなかった。韓国の独立問題にあまり関心がなかったこともまた彼の限界といえる。これは現在でも適用できる問題だ。明らかに日本には善良な人々がたくさん存在するが、日本の右翼勢力の歴史歪曲や改憲の試みなどの悪行もやはりそれと別個に起きている。浅川巧の事例は他の言い方をすれば、私たちが日本の誤った政策に対しては警戒するものの、日本人々まで嫌うのはやめなければならないということを示す事例だと言える。(キム・スハン)

の意見に賛成するカン・ジソンは「数十万人の中の一人によっても私たち韓国人の心にある日本人を憎む感情を少しでもうち消し、和解の方向に進むことが現在の私たちが選択すべき正しい道ではないのか」と主張している。人数の多寡ではなく、「正しい道」かどうかの問題だとするのである。これに対して「一人の日本人が朝鮮人によく接したことで日本が当時犯した誤りは別個の問題」だとするイ・ヨンジョンは「こういう事例のいくつかによって当時独立運動をくり広げ苦痛を受けた数多くの独立活動家や、罪もなく苦痛を受け利用されて死んでいった人々の怨恨を解くことはできない」と言い切る。

と のどちらの意見に賛成かという授業者の課題設定に対して、どちらもあまり変わらないとする意見を読むと授業を行ったか<sup>い</sup>を感じる。授業者の認識 課題設定の枠組みと言いかえてもよい への意見だからである。イ・インソンは「 と がそれぞれ人間としての浅川、民族としての浅川」を表現しているのであり、「彼の目的が韓国人のためのものではなく、すなわち植民地朝鮮を独立させようとするのではな<sup>い</sup>かったことを評価することはできないとする。浅川は朝鮮の「青さ」を豊かにしたかただけなのではないか、というのである。一方、キム・スハンは、そうは言っても、浅川<sup>い</sup>の思想や行動は

「私たちが日本の誤った政策に対しては警戒するものの、日本人々まで嫌うのはやめなければならないということを示」していると、自らとかかわらせながら主張している。

さらに、日本人交換留学生塩村若菜の意見を見てみよう。

浅川は朝鮮工芸品に関心を持っていた。そして、有名な林業士ではなかった。理由は資料で、林業試験場長室で場長から命令を受けていたことから浅川の立場が理解される。その命令を受けたとき反対の言葉を言いたかったができなかったと語った部分から、浅川は身分が高くない人物だと思った。また、関東大震災のとき朝鮮人が放火したとは信じなかったことから浅川が朝鮮をいたわっていたことがわかるし、本当は朝鮮を独立させたかったのではないか。

浅川が本当に朝鮮という国を重要だと思う心があったことがわかる。そして、朝鮮のものだけでなく中国の帽子をかぶっていたという部分から朝鮮以外の国もいたわっていたし、国は関係ないという考えがあったのではないかと思った。このことを述べている金二万は浅川と近い位置にあった、つまり浅川の同僚あるいは後輩ではないかと想像する。

資料の意見に賛成する。なぜなら浅川は資料の「何十万人のうちの一人」だったという言葉は浅川の人物を見るのではなく、初めから浅川が日本人だという考えから出たものだ。逆に、韓国語が上手なことだけでなく韓国文化を理解し韓国文化を愛したことを考えれば、浅川がどれくらい朝鮮を愛したのかわかる。そして、「現在の日本人の姿そのままを受け入れると友好関係を築けるかは疑問である」という、この部分は疑問だ。人によって考えや感じ方が違うのだから、日本人だからという言葉は理解できない。

巧は「国は関係ないという考え」から行動していた。そういう巧を評価するのに「日本人だから」と言って切り捨ててしまっているのかと考えている。塩村は「関東大震災のとき朝鮮人が放火したとは信じなかったことから巧が朝鮮をいたわっていたことがわかるし、本当は朝鮮を独立させたかったのではないか」と主張する。当時の状況から巧は「朝鮮の独立」を明言してはいないが、彼の言動からきっと心の中では思っていたに違いないと判断したのだろう。

### 3. 授業の成果と課題

生涯を通して朝鮮の文化、朝鮮人を愛した浅川巧の生き方を学ぶことは、日本でも韓国でもとても価値のある授業となりうる。それに比して日本でも韓国でも取り上げられることが非常に少ない。その存在を知っている人もあまり多くない。だが、植民地朝鮮で生き、朝鮮を愛し、「韓国の土となった日本人」浅川巧について授業できたことで、一石は投じられたかと思う。

さらに、授業者の課題設定に対して異議を申し立てた高麗大生の積極的な問題提起を読んで次へのエネルギーになった。特に「明らかに（今の引用者）日本には善良な人々がたくさん存在するが、日本の右翼勢力の歴史歪曲や改憲の試みなどの悪行もやはりそれと別個に起きている。浅川巧の事例は他の言い方をすれば、私たちが日本の誤った政策に対しては警戒するものの、日本人々まで嫌うのはやめなければならないということを示す事例だと言える」というキム・スハンの意見は韓国のナショナリズムを相対化していく契機となると思う。

惜しむらくは、こうした意見を授業の場で交換できなかったことが挙げられる。いつもこう書くが、一度きりの授業には限界があることを痛感している。

#### 注

\*1 教科書の記述から見てみると、日本の小学校社会科教科書（6年生，2019年版）は4社とも浅川巧に関する記述は皆無である。

中学校では、教育出版と帝国書院の教科書に記述が見られるが、いずれも本文ではなく、教育出版はコラム「近代に生きた人々 外国から愛された人々」で杉原千畝と浅川巧をそれぞれ1ページを使って記述している。ソウル郊外の共同墓地に葬られていること、その墓石には「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人、ここ韓国の土となる」とハングルで刻まれていること、柳宗悦の思想にも影響を与えたことなどを紹介している。ただし、2005年版のみである。帝国書院は、2016年版になってコラム「朝鮮との架け橋となった日本人」で、柳と巧を取り上げ、主に工芸品に関心を持っていたことを中心に記述している。

高校は、実教出版の『新日本史A』（2014年版，2018年版）が巧について取り上げている。コラム「人物スポットライト」で朝鮮の陶磁器に魅せられた巧が朝鮮の民衆に溶け込み、生活をともにしていたことを記述している。同じ実教出版の『高校日本史A』（2017年版）が、コラム「歴史の群像4 植民地朝鮮の人々と友好をきずいた日本人」で、柳宗悦、浅川巧、布施辰治、田内千鶴子を載せている。巧に関する記述は、教育出版（2005年版）のそれとよく似ている。実教出版以外では、清水書院の『高等学校日本史A』（2015年版，2018年版）が「近代の追求2 大日本帝国をめぐる人口移動」



というコラムの中で巧を簡単に取り上げている。日本史Bの教科書では巧に関する記述は見つけられなかった。

また、韓国の教科書では『韓国近現代史』(斗山<sup>トッサン</sup>, 2007年)が、コラム「歴史の中の人物」の一つとして「朝鮮の陶磁器と民芸を愛した二人の日本人」で、巧と柳を記述している。「朝鮮の魂と歴史を抹殺しようとする日帝の植民地政策を批判した」という記述や、「浅川は、万憂里<sup>マンウリ</sup>共同墓地に愛国志士たちと並んで眠っている」という記述が特徴的である。ただし、教育課程(学習指導要領にあたる)の改訂によって現在は「韓国近現代史」という教科はなくなり、巧を取り上げている教科書はない。

いずれにしても、日本(中学、高校)、韓国(高校)ともに、本文ではなく、コラムでの記述である。したがって、少なくとも教科書の記述という点からは、巧の認知度は低いと言わなければならない。

- \*2 巧を扱った授業の嚆矢は、1990年代初頭の目良誠二郎「福沢諭吉の視点から柳宗悦の視点へ 日朝関係のパクロ型授業を乗り越える試み」(『歴史地理教育』1990年12月号)であろう。茨木のり子「忘憂里」などを使って「二年間を通して、行きつ戻りつ、ゆっくりと、現代日本と世界に生きる生徒たちの興味・関心に応え」ようとした実践である。この授業を受けたある生徒は「最初は“朝鮮なんか”などと考えていましたが、今では大学に行ったら朝鮮語を学ぼうなどとも考えています」と自分の認識の変化をふり返っている。それまで行ってきたパクロ型の授業では「明治以来の日本人の重大な欠点を……克服したいという意欲」を生み出すことができなかったことへの反省からこの実践に取り組んだという。

この実践に学ぶことは多いものの、一方で教師のねらいに落とし込む授業構成になっている。つまり、表題にあるように、高校生の認識を「福沢諭吉の視点から柳宗悦の視点へ」と変化させるべく授業が構成されているのである。それは巧の他に柳、柏木義円、吉野作造、石橋湛山らが取り上げられていることからわかる。

また、この論文で、第1回東アジア歴史教育シンポジウム(1984年)での「韓国人で柳(宗悦<sup>イグアンニョン</sup>引用者)先生や浅川巧の名を知らない者はいない」(李光麟氏)という発言が紹介されているが、巧の認知度に関して世代差があるのかもしれない。

2000年代に入ると、子どもたちの声を反映した授業が実践される。例えば、日韓交流授業として実践された木場泰子「亡憂里は語る 植民地時代に生きた浅川巧」(谷川彰英編著『日韓交流授業と社会科教育』明石書店、2005)がある。

韓国九一高校での授業では、朝鮮の人々と互いを認め合って友好関係を築いていった巧を取り上げ、「朝鮮の文化とそれを生み出した民族に対して敬愛の念を抱き続けた浅川巧の生き方と、その浅川の死後も敬意を表し続ける朝鮮の人々の姿を描」き、そうした互いの「真摯な姿勢が、これからの日韓交流の手がかりであることを」ねらいとした。ところが、韓国の高校生は「浅川巧一人の事例で植民地時代からの韓日の葛藤を解消するのは無理だと思う。もちろん、浅川がそのような背景の中においても、韓国人の生活と文化を尊重したことは大したものだと思う。よりよい韓日交流と葛藤解消のためには、まず正しい歴史を知り、大いに触れ合い、対話す

る時間が長くなることが必要であろう」となかなか手厳しい意見を表明する。

その意見を日本の中学生に紹介すると、今度は「自分たちがやったことじゃないのに、なんで謝らなければいけないの」とこれまた拒否されてしまった。ここから見られるように、子どもたちは一筋縄ではいかないのである。この実践の意味はその事実を明らかにしたことにあるだろう。

地域史の一環として巧を取り上げた鮎澤譲「植民地支配に反対し朝鮮人と友好を育んだ山梨の人物「浅川巧」の授業」(『社会科教育』2018年6月号)は、「朝鮮に心をよせた浅川巧と柳宗悦」を資料に「なぜ朝鮮に渡ったのか」、「どんな仕事をしたのか」など高校生の疑問に答えながら巧の生き方に共感するようすがわかる実践である。「山梨で生まれた浅川巧さんが韓国のためにいろいろ考えて行動を起こしたのは、うれしかった」、「私は、この授業を行うまで山梨県出身の浅川巧のことを知らなかった。韓国との交流で活躍した人物を知らないのは山梨県民として残念だ」という感想を残した。地域の人物を取り上げることによって、身近な存在として高校生に迫っているが、高校生が自分の認識を見つめ直すという点でさらに取り組みが必要であろう。

関連して、授業実践ではないが、米山宏史「マツシロ・無言館・浅川巧 2003年度山梨英和の中三研修旅行」(『歴史地理教育』2005年8月号)では、学年の行事として地域にある松代大本営、無言館、浅川伯教・巧兄弟記念館を訪れ、高校生の平和意識を育てたことが紹介されている。

また、郷土の「偉人である浅川巧の生涯の劇」を創作した実践が発表されている(北杜市立甲陵中学校「人権教育に関する特色ある実践事例」、文部科学省『地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例』, 2018)が、「偉人」という扱いでは、子どもたちの批判的な意見は期待できない。

最後に、高橋珠州彦「草の根の人物から考える東アジアの近代 浅川巧をとりあげて」(2018年8月11日に韓国晋州<sup>ジンジョ</sup>で行われた日韓歴史教育交流会での報告、第25回日韓歴史教育交流会。所収)を取り上げたい。この文章は後に、高橋珠州彦「浅川巧から見た日本の植民地支配」(小園崇明ほか編『子どもとつくる平和の教室』(はるか書房、2019))に整理された。「その時代を生きた草の根の人物の『下からの視点』で考えることで、生徒が時代の息吹を感じながら議論できることを意図した実践」である。子どもたちと同世代の中学生が書いた梶村彩『日韓交流のさきがけ 浅川巧』(揺籃社、2004)を導入の教材として出発するこの実践は、「浅川巧は朝鮮の人びとをどう思っていたのか」、「朝鮮の人びとは浅川巧をどう思っていたのか」という問題を考えていくなかで「そんなに朝鮮の人びとに受け入れられ、朝鮮の人びとに寄り添った浅川巧の態度を日本側は許すのか」という疑問に到達した。前者二つは、いわば教師が考えさせたい問いであったが、そこから子どもたち自らが考えたい問いを導き出し、巧の行動の評価に取り組んでいったといえる。授業のまとめとして、本の筆者(梶村彩)に文章を送っている。子どもたちは「今、日本と朝鮮はいい関係ではない……怖いと思う人もいる……もしこの今の状況を浅川巧さんが知ったらどう思うのだろうと疑問に思いました」と、現実をどう考えたらよ

いか真剣に考えていることがわかる。

高橋実践を分析した日本の大学生は「『浅川は～と思ったはずだ』とか『だったはずがない』という口調の発言がとても多く、これらはその学びに対して熱心であることを表している」とか、「歴史は概して勝者の視点から書かれている。だからぼくらはまるで高台の上から歴史を見下ろそうとする。しかし、浅川の視点に立って歴史を理解しようとするとき、ぼくらは歴史を見上げるしかない。このような視線の相対化に意味がある」と発言している。

さらに、実践そのものではないが、実践を通じた授業構想の提起がある。高橋健司「歴史教育におけるエスノセントリズムとの対峙 日本統治下の朝鮮の教材化をめぐる」(『朝日大学教職課程センター』9号, 2001)と、小川幸司『世界史との対話(下) 70時間の歴史批評』(地歴社, 2012)の「第55講 浅川巧 朝鮮の土となった日本人」である。

また、本実践を行おうと考えた論考に、高吉嬉「二人の『巧』と韓国 浅川巧と藤本巧」(東義大学校東アジア研究所編『戦後70周年, 韓日修交50周年』パンムン社, 2016, 韓国語)と、同「草の根の人々の交流から考える日韓友好 旗田巍・浅川巧・藤本巧を中心に」(『社会科教育研究』134号, 2018)がある。ここに感謝の意を表したい。

- \*3 中学生の場合については、拙稿「中学生の認識に内在する『国家の論理』(植民地主義)を相対化する授業」(『植民地教育史研究年報』20号, 2018)を参照。また、植民地支配の暴力性を批判しつつも、植民地における近代化自体を肯定する意識を日本人、韓国人ともに持っていることを考えると、「植民地近代性」についても授業の射程に入れる必要を痛感する。「植民地近代性」については、尹海東(沈熙燦・原佑介訳)『植民地がつくった近代 植民地朝鮮と帝国日本のもつれを考える』(三元社, 2017)を参照。

- \*4 「한국의 산과 민예를 사랑하고 한국인의 마음속에 살다간 일본인 여기 한국의 흙이 되다.」

- \*5 本授業では当然のごとく日本の植民地支配をめぐる問題と、植民地主義の清算が意識されている。その清算は第一義的には植民者であった日本人に課せられる。しかし、「植民地主義は被植民者を共犯に仕立てることなしには機能しない」(鶴飼哲「日縄とポストコロニアリズム 命名と交渉のポリティクス」、抵抗への招待。みすず書房, 1997, 259ページ)とするならば、韓国人にとってもその清算が課題となり、韓国におけるこの間の一連の「過去事清算」作業をその過程と見るべきだというのが授業者の考えである。参考に、趙慶喜「脱植民地主義の契機としての親日清算 韓国『過去事』論争から日本を考える」(『季刊前夜』第11号, 2007)。

ただし、本授業のねらいは植民地主義の清算ではなく、その相対化にある。

- \*6 1920年9月に東京に渡った方定煥(1899~1931年)は、東洋大学文化学科に聴講生として入学した。ここで日本の『赤い鳥』などの児童文学の隆盛ぶりにふれ、朝鮮に帰ってから児童文化団体セクトン会を組織し、子ども運動を展開していく。1923年には子ども雑誌『オリニ(こども)』を創刊し、朝鮮各地を回り子どもたちに民族の大切さを説いた。な

お、東洋大学文化学科には、教師として柳宗悦が在職していた。大竹聖美『植民地朝鮮と児童文化 近代日韓児童文化・文学関係史研究』(社会評論社, 2009)を参照。

- \*7 日本留学中に朴烈らと「黒濤会」を結成し、帰国後の1925年に朝鮮共産党結成に参加するなど、独立運動に邁進した。解放後の1946年に共産党を脱党し、韓国の初代農林部長官、国会副議長を歴任した。李承晩の独裁に反対して1952, 1956年の大統領選に出馬したが落選する。1956年に反独裁・民主守護、祖国の平和統一を綱領とする進歩党を組織すると、これに脅威を感じた李承晩によって「北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)のスパイと接触して、北朝鮮が主張している南北の平和統一を主張した」という嫌疑で逮捕され、処刑された(徐仲錫(林哲ほか訳)『現代朝鮮の悲劇の指導者たち 分断・統一時代の思想と行動』明石書店, 2007)。2011年1月に韓国大法院は、進歩党の綱領やスパイ容疑など、かつて有罪と判断した部分をすべて覆し、李承晩らに無罪判決を言い渡した(『朝鮮日報』2011年1月22日付)。

- \*8 本実践は科目「人物で見た日本の歴史」の中で実施した。受講学生は80名ほどで、授業はすべて韓国語で行った(2018年10月16日)。授業にあたってさまざまな支援をしてくれた高麗大趙明哲教授と、資料を韓国語に翻訳してくれた李彦叔氏に感謝したい。

- \*9 荒川五郎『最近朝鮮事情』清水書店, 1906, 35~36ページ。

- \*10 善生永助『火田の現状』(朝鮮総督府調査資料15, 1926)より再引用(『韓国併合史研究資料80』龍溪書舎, 2009)。火田を否定する、日本がモデルとした「科学的林学」は、ヨーロッパとその植民地を中心として確立し、植民地朝鮮に持ち込まれた(米家泰作「近代林学と焼畑 焼畑像の否定的構築をめぐる」、原田信男・鞍田崇編『焼畑の環境学 いま焼畑とは』思文閣出版, 2011)。

- \*11 一方で、「当時(朝鮮 引用者)半島の人々の側からは、『朝鮮の禿山は世界的に有名というが、朝鮮の林野荒廃は日本人が朝鮮に来るようになってから盛んに言われたしたことである』という話をよく耳にした」(財団法人土井林学振興会編『朝鮮半島の山林 20世紀前半の状況と文献目録』財団法人友邦協会刊, 1974, 258ページ)と回想した、慶尚南道山林課職員だった三宅正久は「濫伐、濫採が、いかなる事情により、どのような理由で、行われてきたかについての十分な検討と説明がない。また、林政の不備、弱体、弛廃については、林政の内容についての十分な説明がない」(三宅正久『朝鮮半島の林野荒廃の原因 自然環境保全と森林の歴史』農林出版, 1976, 8ページ)とふり返っている。なお、朝鮮総督府の林野行政については、李行衍「朝鮮総督府の林野所有権整理と林政」(『東洋文化研究』11号, 2009)を参照。

- \*12 「内地寒温帯に於ける造林樹種として其の価値極めて少ないものなりと論断せられし」チョウセンカラマツが朝鮮において「優良の成績を挙げ得るは寧ろ当然」だとした(『大日本山林会報』414号, 1917)。

- \*13 『朝鮮山林会報』1922年2月号(高崎宗司編『浅川巧全集』草風館, 1996, 所収)。

- \*14 『朝鮮山林会報』1929年7月号, 14ページ。



\*15 柳宗悦「浅川のこと」、『工芸』40号、1934、90ページ。  
柳は、1922年に「失はれんとする一朝鮮建築の為に」を書くが、それを巧に届けている（高崎宗司編『浅川巧 日記と書簡』草風館、2003、119ページ、1922年8月7日）。高崎宗司は、巧がその原稿を『東亜日報』幹部の張徳秀に届け、『東亜日報』に掲載するよう依頼したと推察している（『増補三版朝鮮の土となった日本人 浅川巧の生涯』草風館、2002、148ページ）。この柳の文章は、『東亜日報』1922年8月24～28日に連載され、後に『改造』1922年9月号に所載された。

\*16 朝鮮の美術や工芸にひかれて朝鮮に渡った伯教は白磁と出会い、1929年から31年にかけて朝鮮の窯跡を調査した。このときの作業を基にして『李朝陶磁窯跡一覧表』を発表している（『朝鮮の窯跡と採集品の記録』、座右宝刊行会編『世界陶磁全集 第14巻』河出書房、1956）。また、『釜山窯と対州窯』（彩壺会、1930）などを著し、1956年には『李朝の陶磁』（座右宝刊行会、1956）で朝鮮陶磁の時期区分を試みている。同時に、『古瓷器や古書画の真価は、……金正喜、吳慶錫……らの水準の高い鑑識眼によって、すでに確認されていた。したがって、日本人が古美術の真価を発見したというのは、韓国美術に理解がない彼らにとっての発見にすぎない』（崔夏林「韓国現代東洋画の復古性検討」、『文学と知性』1978年夏号、韓国語、613ページ）という指摘を看過すべきではない。だが、韓国陶磁は「自律的な発展をうばわれ、日本人の考える『朝鮮らしさ』という強制的な枠のなかで近代への第一歩をすすめざるを得なかった」（片山なび「第3章 韓国陶芸」、出川哲朗ほか編『増補版 アジア陶芸史』昭和堂、2012、77ページ）という主張は、植民地支配を批判しているようで、朝鮮の内在的発展を認めない、一種の植民地支配論にすぎない。

一方、人をして「朝鮮古陶磁の神様」と言わしめた伯教だが、1940年～45年に日本の侵略戦争の本格化に伴う銃後活動を推進した「国民総力朝鮮連盟」（総裁・南次郎）の芸術部門や生活部門の連絡係に名前が見える（林鍾国『親日文学論』高麗書林、1976、104ページ）。

\*17 柳宗悦「彼の朝鮮行」、『柳宗悦全集 著作篇 第6巻』筑摩書房、1981、68～69ページ。「李朝の美を教えた兄弟 浅川伯教と巧」という特集を組んだ『芸術新潮』1997年5月号は、この「大壺」（青花辰砂蓮花文壺）を「運命の蓮の壺」と表現している。

\*18 朝鮮民族美術館の設立をめぐる柳と浅川兄弟のつながりについては、李尚珍「柳宗悦の朝鮮伝統芸術研究 浅川伯教・巧兄弟との繋がりを中心に」（『山梨英和大学紀要』8号、2009）を参照。また、朝鮮民族美術館としたのは、柳と巧の「朝鮮民族の美を尊重」（高崎宗司「解説」、浅川巧『朝鮮民芸論集』岩波文庫、2003、301ページ）する思想の発露だという。

\*19 「本文を読み挿絵を見るにつけても、特に此五、六年間の事が思ひ出される。挿絵に入れた膳の大部分は実に君と僕とが『朝鮮民族美術館』の為に集めたものだつた」（『朝鮮の膳』、前掲『浅川巧全集』、538ページ）。

\*20 同前、446ページ。

\*21 同前、404ページ。

\*22 「緒言」、『朝鮮陶磁名考』（同前、557～561ページ）。1978年に、『朝鮮の膳』・『朝鮮陶磁名考』および『小品集』を収めた『浅川巧著作集』（八潮書店、1978）が出版されると、在日朝鮮人研究者金哲央が書評を書いている。曰く、「暗くけわしい時代に、浅川巧のような人の生き方とその仕事があったことを知ることは、朝鮮工芸への理解を深めるばかりでなく、今後の朝・日両民族のありようについて多くのことを考えさせるのである」（『統一評論』1979年4月号、160ページ）。また、『朝鮮の膳』と『朝鮮陶磁名考』を韓国語に翻訳した目的を、沈雨晟は「日帝強占期の日本人による学問的成果についての実証的分析」のための先行作業と位置づけ、巧の仕事が高く評価している（沈雨晟「訳者の言葉」、浅川巧（沈雨晟訳）『朝鮮の膳・朝鮮陶磁名考』学庫材、1991、韓国語）。沈雨晟は、民俗劇会「男寺党」創立代表、ウリ文化研究所所長などを歴任し、（梁民基編、李京淑ほか訳）『民族文化と民衆 韓国伝統文化の自生的伝承』（行路社、1995）などを著している。そして、1983年に八千代市なぎの原を訪ね、「為関東大震災朝鮮人犠牲者精霊菩薩塔」と書かれた塔婆を見た沈雨晟と金義卿は、韓国に帰ると「関東大震災韓国人犠牲者慰霊の鐘を送る会」を発足させ、ソウル駅頭などで街頭募金を始める。そして、1985年になぎの原近くの観音寺に「普化鐘楼」を建てた。その建立文には「現代の韓国人はその暗い歴史を憎みはしても、今日の日本や日本人を咎めたくはない。むしろ、歴史を正視し、その歴史の前に謙虚な日本の友人にありがたいとさえ思う」と刻んだ（小園崇明「調査者とともにたどる関東大震災朝鮮人虐殺事件の地域 高津・大和田新田・萱田を歩く」、『専修史学』45号、2008、148ページ）。

\*23 東アジアにおける関東大震災時の朝鮮人虐殺研究の進展については、関東大震災80周年記念行事実行委員会編『世界史としての関東大震災 アジア・国家・民衆』（日本経済評論社、2004）を、記憶の掘りおこしとその継承の問題については、関東大震災90周年記念行事実行委員会編『関東大震災記憶の継承 歴史・地域・運動から現在を問う』（日本経済評論社、2014）を参照。虐殺の本質についての解明については、田中正敬・専修大学関東大震災史研究会編『地域に学ぶ関東大震災 千葉県における朝鮮人虐殺その解明・追悼はいかになされたか』（日本経済評論社、2018）を参照。

\*24 前掲『浅川巧 日記と書簡』、247ページ、1923年9月10日夜。なお、李秉鎮は、この「日記」を「朝鮮という他郷で朝鮮人という他者を発見した一日本人の日常と悩みの告白」として読むことを通してこそ、「浅川巧の朝鮮と朝鮮人に対するまなざし」が理解できると主張する（「他者としての朝鮮の発見 浅川巧が朝鮮で書いた日記を中心に」、『日本学』27輯、2008、韓国語）。また、この日記は、ソウル在住のキムソンジン金成鎮が伯教から解放後譲りうけ、守りぬいた貴重なものであり（金成鎮「浅川巧の日記入手の経緯」、高崎宗司・深澤美恵子・李尚珍編『回想の浅川兄弟』草風館、2005）、現在「浅川伯教・巧兄弟資料館」に寄贈されている。

\*25 前掲『浅川巧 日記と書簡』、17ページ、1922年1月28日。

\*26 「北漢山一周」、前掲『浅川巧全集』、392ページ。5人で談笑しているとき、「戸外に三人の和服を着た男の影のある



のに気づいた。その男らが僕が支那料理に居た時隣室に來た三人であつた(392ページ)とある。韓国人の4人は文学結社・塵墟社の同人であり、彼らを、そして巧も含めて特高が監視していたと考えられる。

廉尚燮<sup>ヨムサンソプ</sup>は廉想涉<sup>ヨムサンソプ</sup>という筆名で多くの作品を残し、朝鮮の自然主義文学の祖と評される。彼は、『東亜日報』1920年4月12日付で、柳の「朝鮮人を想ふ」(『読売新聞』1919年5月20~24日付)を翻訳・紹介し、「氏の一言一句が外交的飾辞とか手段的巧言であると誰がけなせようか。これは真理に生きようとする者ならばよく看破できることである」(崔夏林「柳宗悦の韓国美術観 韓国美術史研究の方法を確立するために」、『展望』1976年7月号、103ページより再引用)と評価している。その直前の1919年3月には大阪の天王寺公園で「独立宣言書」を配布した。そして、資本主義の改造をめざし、相互扶助社会を建設するために多岐にわたって活動した東京帝国大学新人会の機関誌『デモクラシイ』で、「米騒動と(朝鮮人 引用者)留学生の行動とは其表面は異なるもその生存の保障を得んとする真剣なる要求に就ては異なる処なきなり」(廉尚燮「朝鮮の諸公に訴ふ」、『デモクラシイ』2号、1919年4月、法政大学大原社会問題研究所編『日本社会運動史料 機関紙誌篇 デモクラシイ』法政大学出版局、1969、24ページより再引用)と、朝鮮の独立運動と日本の米騒動の共通性を指摘している。廉想涉の文学作品については、白川豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡 廉想涉、張赫<sup>チヤンハク</sup>とその文学』(勉誠出版、2008)を参照。

\*27 浅川巧「窯跡巡りの一日」、前掲『浅川巧全集』、284ページ。

\*28 「朝鮮の膳」、同前、409~413ページ。

\*29 洪淳赫<sup>ホン スニョク</sup>「浅川巧『朝鮮の膳』を読んで」(『東亜日報』1931年10月19日付、高崎宗司・深澤美恵子・李尚珍編『回想の浅川兄弟』草風館、2005、211~212ページより再引用)。洪はこの文章に「(『朝鮮の膳』が出版されてから 引用者)いくらか経たないうちに、氏は故人となった。……外国人であるとはいえ、彼の業績、特に私たち生徒に与えた教えるを考えるとき、彼の代表作であるこの本をまだ読んでいない、志を同じくする人に紹介することも、意味のないことではないと思う」(同前、213ページ)と、浅川への追悼の意を込めている。

\*30 前掲『浅川巧 日記と書簡』、248~250ページ、1923年9月10日夜。

\*31 同前、210~211ページ、1922年11月8日。

\*32 前掲「浅川のこと」、89ページ。一方で、「巧さんのやうな、正しい、義務を重んずる、人を畏れずして神のみを畏れる、独立自由な、しかも頭脳が勝れ、鑑賞力に富んだ人は、実に有難い人である」と、安倍能成は巧を悼んだ。その文章の最後を「この人達[平生巧に親しんでいた村人たち 引用者]が朝鮮流に歌をうたひつゝ棺を埋めた風景は、誠に強ひられざる内鮮融和の美談である」と締めくくっている(安倍能成「浅川さんを悼む」、『京城日報』1931年4月28日~5月6日付、強調は引用者)。後にこの文章が整理されて、「人間の価値」という題目で国定教科書『国語 巻六』(1934年版)に載る。ここから、巧の死を悼みつつも、巧および周囲の朝鮮人に対する評価がまったく違うことがわかる。

\*33 「バジ<sup>チヨフ</sup>チョゴリの赤先生」と呼ばれて朝鮮人から慕われた赤羽王郎(本名・一雄)は、長野で自由教育を実践して辞職させられた経歴の持ち主である。赤羽は巧とともに韓服を着て教会に通い、また窯跡もめぐった。赤羽王郎については、今井信雄『この道を往く 漂泊の教師赤羽王郎』(講談社、1988)を参照。

\*34 崔福<sup>チエ ボツキョン</sup> 鉉「浅川先生の想出」、前掲『工芸』40号、85ページ。

\*35 霞関会編『現代韓人名辞典』霞ヶ関出版、1971、249ページ。

\*36 前掲『増補三版朝鮮の土となった日本人』、185~186ページ。

\*37 同前、187ページ。高崎は、「巧は、おそらく三・一運動を目撃したであろう。そして、それに心の痛みを感じたに違いない。巧にとって柳が書いた『朝鮮人を想ふ』は、自分の気持ちを代弁してくれるものであったろう」(同前、104ページ)と類推している。一方で、高崎は「巧が三・一独立運動に際して、どのような態度をとったか、今のところそれを直接的に明らかにしてくれる資料はない」としている(同前、102~105ページ)が、この部分は旧版では「朝鮮で生活していた日本人である巧が三・一運動をはじめとする朝鮮の独立運動に対して、どのように考えていたかを明らかにする資料はいまのところないが」としている(高崎宗司『朝鮮の土となった日本人浅川巧の生涯』草風館、1982、94ページ、強調は引用者)。また、巧は予備少尉の友人に「君が金鶏勲章を貰つて凱旋する時僕は非戦論者の故を以て監獄に居るであらう」(前掲『浅川巧 日記と書簡』、136ページ、1922年8月15日)と「日記」に記していることから、「非戦論者」という自覚があったことがわかる。

\*38 この問題に関連して、浅川巧の思想と行動を分析してきた李尚珍<sup>イ サンジン</sup>は、日韓大学生の意識を調査しながら「浅川巧……の韓国伝統文化理解にみられる行動には、時代と国を越える『普遍性』と『国際性』(=『将来の相互理解に向けての提言』)を見出すことができ、これからの日韓相互理解の指針となる」としている(「浅川巧の異文化理解モデルに関する一試論」、『山梨英和大学紀要』9号、2010)。

\*39 例えば医者であり、朝鮮陶磁器蒐集家でもあった朴秉来<sup>パク ビョンネ</sup>は柳宗悦らが白磁の壺に対して「民芸としてだけでなく韓民族の芸術として正当に評価しようとした努力が窺える」としながら、「われわれは自分の同族が引き起こされた侵奪でかくも困難な苦境に陥っていたために、幾人かの良心的な日本人の良識が引き立ただけであ」り、「柳氏や浅川兄弟は……感傷的な温情や同化を主張することで、われわれをいっそう卑下する結果となったのではないか」(朴秉来『陶磁余滴』中央日報社、1974、韓国語、98~99ページ)と厳しい批判を加えている。

こうした批判はしかし、「民族の心」を民族の固有の排他的な資産だとする対話拒絶の閉ざされた空間から解き放つ発想の芽生えを摘み取るものではないか。その意味で、「いっそう思いを致すべきは、浅川巧がそこ[「苦渋のすえに創造された浅川巧の魅力的な生き方」のこと 引用者]に至るまでの苦悩のプロセスであろう」という梶村秀樹の一文(高崎宗司『朝鮮の土となった日本人 浅川巧の生涯』(草風館、

1982) の書評「柳宗悦に朝鮮を紹介した林業技師の触発力に富む評伝」、『朝日ジャーナル』1982年9月10日号、64ページ) は重い。

さらに、『抵抗』民族主義は、自民族／自己を守る武器ではあっても、他者に対して同時に開かれる解放の武器にはなりえない」とする趙寛子<sup>チョクワンジャ</sup>の指摘(『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環 ナショナリズムと反復する植民地主義』有志舎、2007、8ページ) に留意すべきであろう。

\*40 キム・ヨンボク「忘憂里墓地を訪れて」、『民学会報』33号、1996、韓国語、36～37ページ。

\*41 木場泰子、前掲論文、62ページ。

#### 参考文献

高崎宗司編『浅川巧全集』草風館、1996

高崎宗司『増補三版朝鮮の土となった日本人』草風館、2002

浅川巧『朝鮮民芸論集』岩波文庫、2003

高崎宗司編『浅川巧 日記と書簡』草風館、2003

伊藤郁太郎監修『浅川伯教の眼＋浅川巧の心』里文出版、2011